

## お父さんの脚

中 一

私の父の脚は、三本あります。父は、生まれつき右脚より左脚が細く、短いため義足をつけています。つまり、みなさんから見れば障害者ということになります。みなさんから見ればというのは、私はそう思っていないからです。けれども、私の周りの人の目には、父の脚は障害として映っていました。そう思ったのは、私が小学校四年生の時でした。

その日は授業参観日でした。珍しく父が来てくれたので、私は本当に嬉しくて、授業ではたくさん手をあげました。しかし、次の日学校に行くと、こんなことを言われました。

「おまえのお父さん、なんで脚が三本あるんだよ！なんかこわいし、気持ち悪いよ。」

「え？」

その時、私の中で次から次に疑問がわいてきました。

「なぜ、そんなことを言うのだろう？」

「なぜ、こわいなどと思うのだろう？」

「なぜ、気持ち悪いなどと言うのだろう？」

「なぜ……。なぜ、お父さんの脚は三本なのだろう？」

今まで考えたこともなかった疑問が、私の中でどんどんふくれあがりました。ある日、私は思い切って父に聞きました。

「どうしてお父さんの脚は三本あるの？」

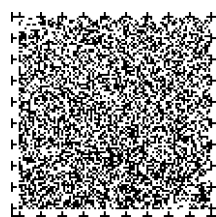
すると、父はきよんとした顔をして、

「脚が三本？そんなもんねーよ。」

と言うのです。そこで、私が学校で言われたことを話すと、父は自分の脚を見て、

「そうかぁー。この義足が三本目の脚ってわけかぁー。うーん。そうだなーまあ……。トランスフォーマーみたいでカッコイイだろう！その子もきつとوراやましかったんだよ。『どうだ。カッコよくていいだろう。』って自慢してやれ！」

ビックリしました。そして、すごくすごく嬉しかったです。「カッコイイだろ！」父が自分の脚を好きでいてくれて本当に嬉しかったです。なぜなら、私は父が大好きだからです。私にとって父の脚は、大



好きな父の個性のひとつに過ぎないのです。

周りの人は父のことを、障害者といいますが、一人一人の顔が違ったり、体型や性格などが違ったりするように、父はきっと、ほかの人より少しだけ目立つ個性をもって生まれただけなのではないでしょうか。その大切な個性をばかにされたり、それが理由で差別をされるのは、とても悔しいものだと思います。

考え方は人それぞれですが、少なくとも私の父のようにその個性をしっかりと受け止めて生きている人がいます。また、その人のことを大切に思っている人がたくさんいます。大好きな人がいます。その人をばかにしたり差別したりすることに、いったい何の意味があるのでしょうか。今でも時々言われる「お父さんの脚……。」

でも、今なら私は胸を張って言えます。

「いいでしょ。カッコイイでしょ！」

ある日、そう言った私に一人の友達が言いました。

「うん。すごくカッコイイよ。」

その言葉は、とても温かく、優しく私の心に響きました。時々目にする障害者への暴言や差別。私自身

も知らず知らずのうちに障害者だからと差別してしまうことがあります。そんな時は、「カッコイイだろ！」と言った父や、「うん。すごくカッコイイよ。」と言ってくれた友達の言葉を思い出すつもりです。そして、その友達のようになんか優しい思いやりのある人になりたいと思います。

一人一人が少しだけ相手を思いやる気持ちをもてば、障害者への暴言や差別はいつかなくなる日が来ます。

私の願いは、誰もが

幸せに暮らせる社会をつくることです。私と同じ願いをもつ人が、一人、二人……いや千人、二千人と増えていけば、誰もが幸せに暮らせる社会が、必ずやってくると思っています。その日がくることを私は心から願っています。

